

友の会 通信

2009.1
No. 88

ASSOCIATES NEWS
THE MUSEUM OF ORIENTAL CERAMICS, OSAKA

展示のおしらせ

1月10日(土)～3月22日(日)

❖ 特別展

「濱田庄司／HAMADA SHOJI—堀尾幹雄コレクション」

❖ 特集展

「中国のやきもの—明器の美」

❖ 平常展

安宅コレクション中国・韓国陶磁、

李秉昌コレクション韓国陶磁、日本陶磁

沖正一郎コレクション鼻煙壺

❖ 休館日：月曜（1/12を除く）、1/13（火）、2/12（木）

やきものの基本的な観点は造形と色である。なかでも青磁の釉色はほかの造形芸術にはみられない特質といえる。釉色は釉薬の色であるが、釉薬の厚さによって、独特の釉色となる。青花などの釉下彩では、素地に描かれたコバルト顔料などの色彩を透明釉の上から、透かして見ることになり、また釉上彩では透明釉の表面に絵付けされた顔料の色彩を直接みるのである。ところが、半透明な色釉による表現では、やきものの胎土と釉薬の表面との間の厚みのある色釉の反射光を見ることになる。この点が表面の反射光だけの絵画や彫刻などと異なり、青磁が独自の芸術性のある色彩をもつ理由である。

やきものの釉薬には厚みがあるので、丁度、海の深浅によって、その色の濃淡が変わってくるように、釉薬の厚さの度合いによって、反射光の色合いが変わってくる。しかも、釉薬に気泡がある場合は、さらに複雑な反射光となる。不透明な釉薬の場合は表面の反射光だけであり、色ガラスのように透明感のある場合は胎土の色が反射されるが、気泡のある半透明な青磁釉などでは、深みのある奥行きを伴った釉色となる。

釉薬の深浅を巧みに使って、青磁釉の濃淡を表した顕著な例に耀州窯青磁の片切彫りがある。釉薬の薄いところでは、胎土の色が透けて見えるが、厚い部分では深い橄欖色となっている。青磁釉を厚くするために、南宋官窯や龍泉窯の青磁では釉薬が3層以上もかけられることもある。また、胎土の色も白色にしたり、黒色にしたり、あるいは白化粧をした上に青磁釉を施したりしている。勿論、青磁釉自体の釉色にもさまざまな工夫が凝らされ、理想的な青磁釉を目指す努力がなされてきた。

このような青磁の釉色を表現するのに様々な言葉が用いられてきたが、晩唐から五代の越窯では秘色という言葉が使われていた。〈秘〉そのものには色彩の意味はなく、秘色の語源として、神秘的な碧色であり、庶民に使用を禁じたといった意味合いがあったようである。

やきものの芸術学 3 青磁の釉色

また、青磁あるいは淡緑色を欧米ではセラドンと呼んでいるが、セラドンにも、秘色と同様に、色彩の意味はなかった。フランスの十七世紀初頭の長編小説『アストレ』に出てくる主人公アストレの恋人である羊飼いのセラドンの名が語源となっている。この恋の物語が二、七十年に舞台で上演されたときセラドンは非常に美しい淡緑色の衣装を着て登場した。セラドンの舞台衣装が評判となり、淡緑色をセラドンと呼ぶようになったという。

（館長 出川哲朗）

展示室から

特別展

「濱田庄司／HAMADA SHOJI—堀尾幹雄コレクション」

掛分指描大鉢（表紙）

高:16.2cm 径:52.8cm 1943年

平成20年は陶芸の人間国宝・濱田庄司（1894～1978）没後30年にあたり、各地で関連の展覧会が開催されました。近年、濱田庄司については再評価の機運も高まり、陶芸家としての濱田のあり方が当時としては極めて革新的であった点や「モダニスト」としての新たな側面などが指摘されています。とくに青年時代の英国滞在中にふれた工芸家たちの仕事と暮らしぶりは陶芸家としての彼に決定的な影響を与えました。後に柳宗悦や河井寛次郎と始めた民藝運動も近年再評価されていますが、濱田陶芸の再評価においては従来の民藝的な視点を一旦白紙にして、一人の陶芸作家の作品として対峙することが必要と思われます。濱田庄司と親交のあった堀尾幹雄氏から当館に寄贈された濱田庄司作品のコレクションは200点以上におよび、本展ではそれらを一堂に展示します。濱田の代表的な作品も多く、また充実した茶碗コレクションも大きな特色であり、濱田陶芸の真髄とその魅力を味



写真上
象嵌茶碗 濱田庄司
高:8.3cm 径:14.5cm 1944年秋 Acc.No.32161
堀尾幹雄氏寄贈

写真下
加彩騎馬女俑
唐代・18世紀前半
高:37.0cm Acc.No.10698 住友グループ寄贈

わうには十分な質と内容を有しています。20世紀の日本の陶芸家を代表する世界のHAMADA SHOJI。その新たな魅力を知る絶好の機会です。

特集展

「中国のやきもの—明器の美」

明器（めいき）とは中国において古くから副葬用につくられた器や俑などを指し、各時代の生活様式や死後の世界観を示す貴重な資料です。中国陶磁の歴史において明器は重要なジャンルの一つであり、本展では漢代から唐代の明器を中心にご紹介します。

次回展示予定:

平成21年4月4日(土)～7月20日(月)

テーマ展「鈴木正男氏寄贈—淺川伯教が愛した韓国のやきもの」(仮称)



掛分指描大鉢 濱田庄司
高:16.2cm 径:52.8cm 1943年
Acc.No.32033 (堀尾幹雄氏寄贈)

編集後記

❖ 上記の「やきものの芸術学」で出川館長が触れている「アストレ」は、オフレ・デュルフェによる全編5000ページという長大な作品です。ローマ時代の羊飼いの主人公アストレと若者セラドンの恋物語で、17世紀のバリの貴婦人達の間で大流行したそうです。読んでみたいと本を探してみたのですが、みつかりません。代わりに2009年2月にエリック・ロメール監

督が映画化した作品が上映されることがわかりました。この映画でも淡緑色の衣装を着たセラドンを見ることができそうです。(S.S.)

ボランティアの窓

❖ 朝鮮時代の蓮花文壺の説明で、「少し腰を落として下から見てください。紅い蓮の花が緑を帯びて見えませんか?視線を元に戻して見て下さい。視線を変えると花の色が違って見えませんか?」いつもの様にご案内している一人の女性の方が「美しいですね。感動しました。」と涙ぐまれました。たった一つの壺で人をこんなに感動させる事が出来るこ

とを実感し、これからも皆さんと一緒に感動を分かち合えるガイドを務めたいと喜びと充実の印象に残った日でした。(M.K.)

大阪市立東洋陶磁美術館
友の会通信 通巻第88号
2009年1月1日発行 No.24-4(年4回)

編集・発行:大阪市立東洋陶磁美術館友の会事務局
〒530-0005 大阪市 北区中之島1-1-26
TEL.06-6223-0055
http://www.moco.or.jp
デザイン:清嶋滋+studioTWN 印刷:岡村印刷工業株式会社

「酒に対しては当に歌うべし―酒と漢詩」

第67回講演会要旨

◆ 南山大学外国語学部教授 蔡毅氏

酒は奥深い文化です。私は数年前に『君 当に酔人を怒すべし―中国の酒文化―』を出版し、中国酒の歴史、酒器の紹介、中国での政治と酒の係わり、酒と文人、文学芸術の関係について書きました。ここでは、酒と文学や芸術がどのように係わってきたのかを、主に酒と漢詩を中心にお話したいと思います。

3000年中国文学史上で酒を飲まない詩人はなく、その中でまず名前が挙がるのは李白です。彼の現存する1000首くらいの詩の中で酒に関したものは20%くらいあり、白居易も22%が酒に言及しています。酒を語らず、また飲まないという詩人がないことは、中国文学の特別な現象なのです。中国古代の詩人達が酒を好んだ理由は3つに分けて考えられます。第一は憂いを払うためで、中国の歴史書の『漢書』に“酒は天の美禄”とあり、神から賜ったものだと書かれています。魏の曹操 (Fig.1) の「短歌行」を紹介しましょう。中国では曹操に対する評価は宋代以後、非常に悪く、すべては『三国志演義』によるものであって、漢王室の系統に繋がる劉備の敵の曹操は、反逆者と考えられましたが、実は優れた政治家で、一流の詩人でもあります。「酒に対して当に歌うべし 人生いくばくぞ」とえば朝露の如し 去りし日は苦だ多し 慨して当にもって慷すべし 憂思忘れ難し 何をもって憂いを解かん 唯だ杜康あるのみ」中唐以降に詩が複雑となり、歌えないものもでてきましたが、曹操の時代には詩は基本的に歌えるものでした。「酒を飲むなら、詩を歌うべきだ。人生は朝露のようなもので、すぐ消えてしまう。」中国の文人達が酒を一番よく飲んだのは、この魏晋時代でした。政治は混乱し、いつ死ぬかわからないのです。「人生の憂いはどうしたら取り除けるのか、ただ杜康しかない。」この杜康は、酒の発明をして神として崇められた人です。彼が農作業で食べたご飯の残りを、穴の中に入れておいたところ、数日たって見ると液体になっており、飲むとおいしかった。これが中国での酒のできた始まりとされ、中国では杜康は酒の代名詞にもなっています。

第二は酒で自己防衛をすることです。その代表的なのは魏晋時代の阮籍 (Fig.2)、嵇康、劉伶 (Fig.3) などの竹林七賢人です。当時、権力を握った司馬一族によって文化人は虐殺され、残酷な政治の時代でした。その司馬氏が阮籍との間に姻戚関係を結ぼうとした時に、阮籍はそれを避けるため、酒を飲んで二ヶ月昏睡状態となり、司馬氏を呆れて諦めるようにさせたのです。もう一人の劉伶の『酒徳頌』は、中国で最初のお酒を讃える文章です。『世説新語』には“劉伶が酔って全裸で部屋の中にいるのを人々が非難すると、私の家は天、私のズボンはこの家なのだ。お前達は何故、私のズボンの中にもぐりこんできたのか、出て行きなさいと答えた。”とあります。また常に酒を飲んでいるので、下僕に“私はいつ、どこで死ぬかわからないので、鍬を持ってついてきなさい。そして私が死んだら、その場に埋めなさい。”と命じたほどの酒飲みでした。ある日、劉伶の妻が酒を止めるように頼んだところ、劉伶は禁酒を神に誓うとし、儀式のための酒や肉などを用意させ、それらを飲んだ後に、一篇の詩を書きました。「天 劉伶を生み 酒を以て名を為さしむ 一飲一斛 五斗にして醒を解く 婦人の言 慎んで聴くべからず」「私は神から生まれた劉伶なので、私の命は酒。一回に一斛」晋時代なら、一斛は10斗、一斗は2リットルであり、醒というのは悪酔いを意味します。「10リットルの酒を飲んで、悪酔いを解消する。女性の話は聞いてはいけない」ここで飲酒宣言をしたわけです。今の中国の代表的な酒は、元時代にできたアルコール度数が50度くらいの蒸留酒である白酒です。この度数の酒なら、李白でも劉伶でもたくさんは飲めないでしょう。それ以前の醸造酒は、米などで作った濁り酒でアルコール度が低いものでした。陶淵明の「飲酒」という詩には有名な二句があります。「但だ恨も謬誤の多きを 君当に酔人を怒すべし」中国文学史上で酒と詩を結びつけたのは陶淵明です。陶淵明以前の阮籍の現存する百首以上の詩には酒に関するものは、一句、二句くらいしかないのです。陶淵明から意識的に酒と詩を一体化するようになり、彼の作品では四割が酒に言及し、それは李白の2倍にもなります。陶淵明以後、中国文学では、詩と酒は密接な存在となります。

三番目の個性の開放には中国文化の特色が窺えます。中国文化の一つの重要な特徴は、宗教色の希薄さです。中国では儒教は宗教ではなく思想と考えられ、儒教とはいわず儒家と称します。しかし、宗教的な要素もあるので、中国での三教は儒教、道教、仏教の三つをさし、その中で一番中国特有なもの、道教です。道教は老荘思想が基本的な信仰であり、厳格な宗教ではなく酒の性格からいえば、この自由奔放な道教が一番近いといえます。中国は儒家思想が強く堅苦しいことが多いので、私は李白のような性格は、制限が多すぎて反抗すると思います。そこで酒を飲んでその制限を突破する、そんな道教の信者に李白もいたのです。

初唐の詩人の王績も酒豪でした。彼の「酔郷記」には、大昔の中国にはこうした理想国があったといっています。その国には何の制約もなく、陶淵明、阮籍、そして自分の王績くらいの十数人が酒を楽しんでいるのです。面白いところは、この理想国はヨーロッパのユートピアとは違って、修行などの努力をすることはなく、ただ酒を飲んでいたら行けるという理想国なのです。李白 (Fig.4) の代表的な二句は「月下独酌」にあります。「三杯 大道に通じ 一斗 自然に合す」大道とは真理です。「三杯飲めば真理の世界に行ける。一斗飲んだら、自然に合す」中国文学では人生の最高境地を“天人合一”といえます。天は自然であり、天と人が一体化してどちらが自然でどちらが人間かわからなくなる、それが人生の最高の境地なのだといえます。李白は酒を一斗飲んだら、その境地になれるといっています。その境地に行けるのは酒しかないというのが文人達の考えなのです。「兩人対酌して山花開き 一杯一杯復た一杯 我酔うて眠らんと欲す 卿 且く去れ 明朝意有らば琴を抱えて来たれ」「山中で二人が飲んでいるそばに花が咲いている。一杯一杯また一杯」、これは李白の率直さが端的に現れています。「私は酔ったので君は出て行ってくれ」この一句は李白ではなく陶淵明の話そのまま引用したものです。次の句では李白が「明日また飲みたいのなら、琴を持ってきてくれ、一緒に楽しみましょう」といっています。本当に、人間か、自然か、私が誰かわからなくなる、これこそが李白の自由な精神なのです。

次の話では漢詩創作と酒についてお話します。古代の詩人にとって、詩作の時に酒が重要だった理由は、5つに分けられると思います。一つは、インスピレーションが酒を飲むことによってひらめくので、いわば酒は靈感の触媒なのです。杜甫は「飲中八仙の歌」の中で、李白をこのようにいっています。「李白は一斗詩百篇 長安市上 酒家に眠る 天子の呼び来るも船に上らず 自ら称す臣は是れ酒中の仙なりと」李白は酒一斗を飲めば百首の詩を作る。長安(今の西安)の町の酒屋で酔って寝ていた時に、皇帝のお召しがあっても船に上らない。私は酒中の仙人だからと」これは非常に李白らしい表現です。中国の歴史上、政治の権威に対して李白のように反骨を抱く人はあまりいません。ある日玄宗皇帝が李白を召しだと、彼は大変酔っていたので、楊貴妃に親を持ってこさせ、楊国忠宰相に墨をすらせ、権力者の宦官高力士に履を脱がさせたという有名な逸話があります。これは史実かどうかは定かではありませんが、李白がどれほど権力者に対して、反抗心があったかを物語っています。“君 当に酔人を怒すべし”玄宗皇帝も、酔っている

李白を怒ることができないのです。この中で歌われている“李白一斗詩百篇”は杜甫の誇張です。李白が一度に百首の詩を書いたという記録はありません。同様の話が日本にもありますがそれは確かな事実で、祇園南海という和歌山の江戸前期の詩人の作に「一夜百首」という本が残っています。これは彼が17歳の春分の日、百首の詩をすぐ作れるかと聞かれました。彼は酒があればと答え、一夜で百首の詩を書きました。しかし即興ではなく事前に用意してあったのだと考えた人が、その年の秋分の日に、もう一度百首の詩を作るように促し、南海はまた酒を飲みつづ百首を作ったので、今二百首残っています。酒を飲んで頭の回転が速くなることもまた靈感の触媒たる所以でしょう。

また酒を飲んで幻想の天国に行くことができ、その代表に月があります。遠く離れた家族や友人のことを偲びつづ月に寄せて詩を書いたのです。李白も月についての詩は、酒ほどではないですが「酒を把って月に問う」などかなりあります。ここで南宋の詩人の楊万里の「重九の後・・・」を例としましょう。中国の古典では奇数は陽数で、その一番大きい九が重なっている九月九日が重陽、重九となります。古代にはこの日に山に登り菊の酒を飲むと病にならないという風習があります。楊万里も重陽の日に菊の酒を飲みましたが、重陽の日には月はまだ丸くなく、十五日まで待たなくてはなりません。中国人の詩の月のほとんどは満月で、三日月はあまり表現ませんが、日本人はかえて残月の美を好みます。この楊万里の月も満月なのです。「老夫渴くと急なれど月更に急なり 酒杯中に落つれば月 先に入る 青天を領し取りて並びに入り来たり 月と天と都て蕭し湿す 天の既に酒を愛するは古自り伝わるも 月の飲むを解せざるは真に浪言たり 杯を挙げて月を將って一口に呑み 頭を挙げて月の猶お天に在るを見る 老夫大いに笑いて客に問うて道う 月は是れ一回か還た兩回かと 酒 詩腸に入れば風火発し 月 詩腸に入れば冰雪滂す 一杯未だ尽きずして詩已に成る 詩を誦して天に向かえば天も亦た驚く 鶯んぞ知る万古の一骸骨 酒を酌みて更に一団の月を呑めるを」月を見ながら酒を飲んでいる、月も酒が好きなのだろう、杯の中には月が入っているので、月ごと飲んでしまおう、しかし飲んで月も空にある。私は客に聞く、月はいつあるのか、私が飲んだ月は体内に入って立派な詩になり、その詩を空の月に歌い上げると、空も驚ろくことだろう、私のようなつまらない男がまた酒を飲んでまた一つ月を飲んでしまう」このようなユーモア溢れる表現は、酒を飲んで自由な境地、幻想の天国に行かなくては、でてこないのです。日本の菅茶山の「月下独酌」は五言絶句で、題は李白からとっています。「酒を把りて明月を邀う 杯中 金 波を作る 豪来 頻りに吸い尽す 腹に幾嫦娥を葬れるや」「私は杯の中の月をそこに住むという嫦娥もるとともに飲んでしまった。私のおなかの中に嫦娥は何人入ってしまったのだろうか」嫦娥は中国の伝説の美人です。彼女の夫の家にあった不老不死の薬を嫦娥が飲んだので、体が軽くなって月まで飛んでいってしまったという伝説なのです。江戸時代の文人は中国文学の素養が非常に高く、菅茶山も中国文学に精通していました。彼もまた酒を飲んで、こうした幻想の天国に遊んだのです。

中国文化は誇張の文化といってよく、特に詩では大きなスケールで表現する伝統があります。一番有名なのは李白の“白髮三千丈”、白髪が9000メートルあると誇張しているのです。これだけ誇張するには酒の力も重要です。書では、唐時代の張旭、懷素は草書の中でも狂草といえます。張旭は、初めは酒を飲みつづ筆を書いていたが、最後は筆を捨て頭髮で墨をぶちまけて書いたという記録があり、この人の作品は凄く勢いがあります (Fig.5)。南宋の陸游も狂草をよくしました。彼の「草書歌」にはこういう二句があります。「呉箋蜀素も人をして快からしめず 高堂三丈の壁に付与す」呉箋は紙、蜀素は絹で、ともに上等な品ですが、「それでは満足できず、高堂の三丈の壁に書いて、初めて存分に腕をふるうことができるのだ」という意味です。陸游は、酒を飲み壁に大書して自由奔放に振舞い、詩も草書も誇張な表現をとったのです。

次は風雅の趣旨についてお話します。中国の書聖である王羲之が遊んだ“曲水流觴”は文人達が杯を溪流に流し、それが前に止まった人がその酒を飲み詩を書くという遊びです。曲水とは曲がっている溪流、觴(杯)を流すというものです。王羲之は、この遊びの後に有名な「蘭亭序」を書いており、これは中国書道史上の最高峰ともいえるものです。この“曲水流觴”は風流な文人の遊びとして、中国だけではなく、韓国にも日本にも伝わりました。

風雅の趣旨としてもう一つ上げられるのは、女流作家の存在です。清代の林佩環の「答外」を紹介しましょう。中国では夫を外子といい、佩環の夫は張問陶という有名な詩人でした。「君の筆底に煙霞有るを愛せば 自ら金釵を抜きて酒家に付す 人間の才子の婦を修められば 清瘦たること梅花の似くなるとも辞さず」君の筆からは素晴らしい詩が生まれる。いい詩を書くためには酒が必要なので、私は進んで簪を抜き酒と交換してきましょう。詩才あるあなたの妻となれたので、梅花のように痩せてしまっても後悔しません」酒は日常生活の中でも、文学の創作に対して重要な役割を果たしていたのです。

このように酒には多くの精神的要素がこめられています。中国文化では酒は文人達が思いを述べる時に欠かせない永遠の主題となりました。唐時代の王維の「送元二使安西」では友との別れを次のように歌っています。「渭城の朝雨輕塵を漉し 客舎青青柳色新たなり 君に勸む更に一杯の酒を進めんことを 西のかた陽関を出づれば故人無からん」渭城は敦煌の西南にあたり、中原と西域を結ぶ交通の要所でした。「陽関を出てしまえば、異郷の地となり、古い友人とも離れ離れになってしまう。だから友よ、更に酒を重ねてくれ」と王維は友への真摯な友情と人生に対する深い愛情をこめて歌ったのです。

最後に、晩唐の詩人で中国ではほとんど名を知られなかったにもかかわらず、日本で非常に有名になった人、于武陵を紹介します。于武陵は明時代に編まれた『唐詩選』にその作品が取り上げられ、この本が日本の文人達の必読の書であったことがその理由と思われる。「君に勸む金屈卮 満酌 辞するを須いず 花発けば風雨多く 人生 別離足る」この詩は後に井伏鱒二の翻訳によって、更に人口に膾炙されるようになりました。「コノサカゾキヲ受ケテクレ ドウゾナミナツガシテオクレ ハナニアラシノタエモアルゾ 「サヨナラ」ダケガ人生ダ」。この流れは、中国から日本へと伝わってきた酒文化が、決して影響を直線的に与え、受けただけではなく、偶然性と必然性が常に交錯して相互に作用しあうこともあった例を示しています。“天の美禄”には洋の東西を問わず、その誘惑に抗うことは難しいことです。適度に酒を楽しみつつ、この奥行きの高い酒文化をどう盛りたてていけるか、現在の私たちへの課題なのかもしれません。

Fig.1,2,3,5は「君人を怒すべし―中国の酒文化―」農山漁村文化協会、2006年発行、Fig.4は「名品百選」東京国立博物館、1990年発行より転載しました。



Fig.3 劉伶「竹林七賢・榮啓期」南京博物館蔵

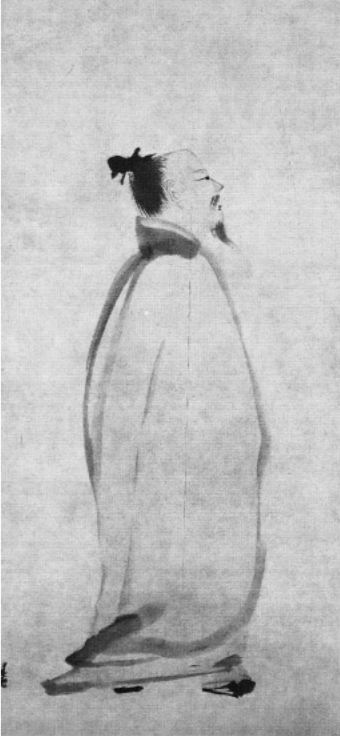


Fig.4 李白吟行図（部分）梁楷筆 東京国立博物館蔵

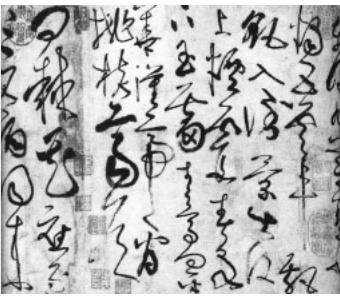


Fig.5 「古詩四帖」（部分）伝張旭筆 遼寧省博物館蔵

プロフィール



蔡毅 1953年中国南京出身。1988年来日、京都大学大学院文学研究科博士課程を経て、現在南山大学外国語学部教授。主な著書は『日本漢詩論稿』中華書局2007年、「君 当に酔人を怒すべし―中国の酒文化―」農山漁村文化協会2006年、「日本における中国伝統文化」誠誠出版2002年、共著「市河寛齋」研文出版2007年など。